梵語訳 Avesta の意義

The Significance of Skt. Version of the Avesta

岡 田 明 憲^{*}
OKADA Akinori

イランからインドにエクソドスしたゾロアスター教徒たち、いわゆるパールシーが移住地の言語を使用するようになったのは、単に時間の経過にともなう自然な現象としてだけでなく、特別な事情があった。彼等の移住の歴史を物語る『キッセ・エ・サンジャー』などによれば、武器を捨てることやインド風の服装をすることと同様に、土地の言葉を使用することが移住の条件であった。サンジャーンの王であったジャーディー・ラー⁽¹⁾ナに、この条件を受け入れることを約束して、パールシーたちは独自の信仰と儀礼を許され、その結果、今日までゾロアスター教徒の共同体を維持できたのである。土地の言語として彼等の使用したのはグジャーラーティーであるが、聖職者にとっては、貴人を相手にしたり儀式に際しての雅語として、サンスクリットすなわち梵語の知識も必要であった。

伝説によれば、ジャーディー・ラーナ王に対して、パールシーの聖職者がゾロアスター教の教義を説明する際に用いた言語は、サンスクリットであったとされる。この説明は、後に Aka Adhyaru によって16シュローカに整理され、梵文写本で残っている⁽²⁾。また今世紀の初頭までは、パールシーの結婚式における閉会の辞の一部をサンスクリットで行う伝統があり、それはヒンドゥー教徒の支配者に儀式が結婚式であることを知ってもらうためであった⁽³⁾。さらに祭式・儀礼の指示は、パフラヴィー語を用いた場合 nirang と称されるが、サンスクリットを用いた kriyā と称するものも存在する。梵語によるパールシーの著作としては、『アヴェスタ』やパフラヴィー文献に基づくゾロアスター教関係のものは無論のこと、『アシュターンガ・ヨーガ・フリグヤ』といった医学書や、『チャンダー・ブラカーシャ』などの暦学に関するものも伝っている。これらの中でゾロアスター教関係のものは、今世紀の初頭に S.D.Bharucha により出版された⁽⁴⁾。

梵語による『アヴェスタ』の訳は、「小アヴェスタ」と「ヤスナ」が存在するが、他に「ウィーデーウ・ダート」の断片も伝わっている。この梵語訳『アヴェスタ』の作者は、12世紀の学匠 Neryosangh に帰せられ、彼には他に『メーノグ・イー・クラド』⁽⁵⁾

* 和光大学非常勤講師
Lecturer, Wako University

や『断疑論』および『アルダー・ウィーラーフの書』の梵語訳が存在する。彼の梵語は、連声法に特殊な点が見られる他に、パフラヴィー文に影響されて、土着の著作家と若干異なるシンタクスを用いている。「ガーサー」や「ホーム・ヤシュト」(ヤスナ9～11章)および「ニヤーイシュ」⁽⁶⁾に関しては、彼の梵語訳を利用した文献学的研究が存在するが、アヴェスタ本文やパフラヴィー訳註に比べれば、研究者の注意を引くことがなかった。

近代の文献学的研究において、梵語訳はパフラヴィー訳の重訳にすぎずとして、半ば無視されてきたのは事実である。しかし梵語訳文を注意して読めば、パフラヴィー訳を捨てて、アヴェスタ原語に従った個所も見出せる。例えば、Av. aməša spənta を Phl. は amahraspand とするが、Skt. は原語にならって amiśāspimta としている。さらに梵語訳『アヴェスタ』に関する数少ない研究・論考も、これまでのところ専ら言語学・文学の領域に限られており、思想内容に踏み込むものは皆無である。この方面では最近の研究とも言える Taraf の書も、lexikographisch であることを謳っている(同書・序)。しかし新たな問題意識をもってすれば、梵語訳の価値を見直すことは不可能ではないばかりか、大いに意義あるのも明らかになる。その例証を、比較的明瞭な「小アヴェスタ」に属す Niyāiš より採って、以下に示す。

ゾロアスター教徒の代表的な祈りである「アフラ・マズダーを満足させて……アシャを称える」なるアヴェスタの文を、梵語訳では satkāraye svāmināṃ mahājñānināṃ ……staomi puṇyam としている(Ny 1,2)。svāmin は「主・王」の意味であるから ahura に通じ、また mahājñānin は「大智者」となるから mazdā に近い。この意味で梵語訳は、名称のみをまねたとも言えるパフラヴィー語の ohrmazd よりも、アヴェスタ語の原義に忠実である。しかし、ここで注目すべきは、svāmin も mahājñānin も、シヴァ神の名称として用いられることである。前者は一般に神の特性を示すものであり、ヴィシュヌやスカンダをも指すが、後者はシヴァ神百名称(śīvanāmasahasra)の一つとして挙げられるものであり、梵語訳の作者がヒンドゥー教のシヴァ崇拝についての知識を持っていたことを予想させる。

パールシーが移住した当時のグジャラーートを支配したソーラーンキー王朝は、シヴァ崇拝において有名であり、ビーマⅠ世の復興したソームナート寺院は、アル・ピールニーの『インド誌』にも記されている。このソームナートと、彼等が最初に移住したディウとは遠くない距離である。そこで当然、パールシーが接触したヒンドゥー教徒には、シヴァ派に属するものが多かったはずである。またグジャラート地方は、古くから太陽神信仰の盛んな土地で、各地にそれを証する神像や寺院が遺っている。⁽⁷⁾ところで Xwaršēd Nyāiš を見れば、太陽神ワフルがスーリアと同置されているのが判る。これは、当時のグジャラーートの太陽神信仰の性格を窺える資料としての価値がある。何故

なら、ヒンドゥー教における太陽神には種々のものがあり、『ヴェーダ』でも、ミトラ、プーシャン、スーリアは各々異なり、後にはミヒラなども、ミトラと同一の起源であることを忘却され、別の神として信仰されていたからである。

aša と drug の対立は、ゾロアスター教的善悪二元論を代表する概念であるが、一般になされる様に「ガーサー」や古代ペルシア語碑文での対応語の使用例に基づき、この両語を「真実」と「虚偽」をもって解すだけでは十分でない。両語の概念は時代とともに変遷し、『アヴェスタ』においても、「ガーサー」と新体アヴェスタの部分、特に「ウィーデーウ・ダート」では明白に異なっている。「真実」と「虚偽」をもってする解釈は、言語学的立場に立てば、それなりの有効性をもつとはいえ、ゾロアスター教徒が実際にこの両語にこめてきた意味を十分に明らかにするものではなく、むしろ隠蔽する可能性もある。この意味で、この両語についても、伝統的教學における解釈を再考する必要がある、上記の様に aša を梵語訳で puṇya とするのは大いに参考になる。

「徳」や「福」と訳される puṇya は、善業を積むことにより得られ、それにより天国の来世が約束されるものである。それに対しゾロアスター教におけるアシャも、単に「善」という道徳的価値を意味するだけでなく、死後の運命と密接に関係している。asavan すなわちアシャを有する者＝義人とは、天国を約束された者や天国の住人を指す。またインドの宗教的文脈における puṇya は、しばしば「罪・穢」を意味する doṣa に対立するものとして説かれる。これは「ウィーデーウ・ダート」等において、aša に対立する drug が専ら「穢」の意味で用いられているのと並行した現象である。すなわち、道徳的価値を示す「善・悪」の関係が実体視され、「浄・不浄」と同一視されているのである。ゾロアスター教は単なる倫理的宗教ではない。そのことは、複雑な浄めの次第が重視される、この宗教の祭式・儀礼を考慮すれば明らかである。

drug は、「ニャーイシュ」では欠くが、他の部分を見れば、そのまま druja とされたり (Ys 49,3), また devī と訳されている (Ys 30,8)。devī は、アヴェスタの drug が nasu と結合して、屍体にとりつく女魔とされた解釈を継承するものである。一方 doṣa とほぼ同義の pāpa が、「悪」の概念を表示するものとして、梵語訳で用いられていたことが判る。すなわち、bad, evil の意のパフラヴィー語の wattar を pāpakarman と訳し (Ny 1,10), sinner を指す wināhgār を pāpakarmin とする (Ny 1,15) などの例がある。しかも後者の場合は、それが使用されるパフラヴィー註の文脈を見れば、ミスラが武器をもって悪者を殺すとする意であるから、悪者はアヴェスタで言う miθrō. drug であるのがわかる。それ故、ここに drug と pāpa の関係も窺えるわけである。さらに pāpa と drug と結びつけるのは、「ガーサー」の精神にも^{かな}適うことになる。何故なら、「ガーサー」では悪の起源に関して「惑わし」すなわち ādēbaoman を説くが

(8)
(Ys 30,6), ヒンドゥー教においても, pāpa は moha の結果とされるからである。

punya と pāpa の対立を重要な教義とするのが, ジャイナ教である。その有情論の七諦説にこの対立が説かれ, 両者は善と悪の業 (karman) を意味し, それにより業身 (karma-śarīra) を形成するものとされた。ジャイナ教の教義では, 業は微細な物質で, 靈魂をとり囲むものと解されたのである。この善・悪業の対立と実体視は, ゴロアスター教における aśa と drug の対立を理解するのにも役立つ。梵語訳の pāpakarman と pāpakarmin の原義は, 共に「悪業者」である。それに, ネールヨーサング在世当時のグジャーラートは, 有名な Hemacandra の活躍によりジャイナ教が隆盛をきわめ, 以後この地方はジャイナ教白衣派の中心地となるのである。

ゴロアスター教の形而上学が, mēnōg と gētīg の相異なる存在の次元を説いたことは広く知られているが, この両語が実際に如何なる世界観に係わっていたのかについては不明な点も多い。両語を物質と精神の関係に還元することは, 必ずしも正確な理解とは言えない。それ故, 梵訳者が mēnōg を paralokacārin, gētīg を prthivīcārin と訳している (Ny 1,9) のは, 非常に興味深い。cārin は「動く」意の car- より派生した語で, そこから生存や存在を意味する。「大地」を指す prthivī の場合は無論のこと, paraloka における存在も動的なものと考えられていたわけである。すなわち mēnōg は, 西欧の学者がしばしば説く様な, プラトンのイデア界とは同一視できないことが判る。さらに mēnōg の意義を明らかにするものとして, paralokacārin が śūnyacārin で置き換えられる例 (Ny 1,13) があるのも参考になる。

paraloka は, prthivī(-loka) が「この世」を表すのに対し, 「あの世」を意味する。そして具体的には死語の世界を指す。paraloka-gama とは, あの世に赴くことであり, 死ぬことである。また paraloka-vidhi は葬式を意味する。さらにヒンドゥー教でいう tri-loka は, 天国と大地と地獄の三界を指す。この中で天国と地獄は, ゴロアスター教の場合は, 死後の世界としての「あの世」になる。また三界を, 天と地と, その間の中間界 (antarikṣa) と解す説もある。中間界とは具体的に空中を指すから, śūnyacārin すなわち「空中を移動する存在」の場所となる。mēnōg は, ゴロアスター教の伝統にそって「不可見 (adṛśya)」と訳される場合もあるが (Ny 1,11), 以上の点を考慮すれば, 単なる観念的存在でなかったことは明白である。

既に述べてきた幾つかの例は, 梵語訳『アヴェスタ』が, ゴロアスター教における伝統的解釈や, パールシーに対するヒンドゥー教の影響関係を知る上で, 非常に役立つ資料であることを示している。又この資料の研究は, 中世初期のグジャーラートの宗教事情を側面から明らかにするものとして, ゴロアスター教の研究者にとってだけでなく, ヒンドゥー教の研究者にとっても有益であるのがわかる。それ故, 今後はイラン学とイ

ンド学の両サイドから、文献学、言語学に限定されことなく、宗教学や歴史学的にも、この梵語訳『アヴェスタ』が研究されることが望ましい。

注

- (1) この王を S.H.Hodivala は Vajjadevrai に比定した (*Studies in Parsi History*, Bombay, 1920, pp.67-91) が、定説になってはいない。
- (2) H-P.Schmidt, “The Sixteen Sanskrit Ślokas of Ākā Adhyāru”, *Bulletin of the Deccan College Research Institute* XXI, 1963, pp.157-196.
- (3) J.J.Modi, *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees*, Bombay, 1937, p.39.
- (4) *Collected Sanskrit Writings of the Parsis*, 6pts., Bombay, 1906-1933.
- (5) Yasna 49-56 は他の訳者と推定されている。
- (6) J.Unvala, *Neryosangh's Sanskrit Version of the Hōm Yašt with the Original Avesta and its Pahlavi Version*, Vienna, 1924.
M.N.Dhalla, *Nyaishes or Zoroastrian Litanies*, New York, 1908.
Z.Taraf. *Der Awesta-Text Niyayiš mit Pahlavi- und Sanskritübersetzung*, München, 1981.
- (7) L.P.Pandey, *Sun-Worship in Ancient India*, Delhi, 1971, pp.244- 参照。
- (8) W.D.O'Flaherty, *The Origins of Evil in Hindu Mythology*, Barkeley, 1976, p.7.